◎聖徳太子　「坐禅（＝宴坐）」をめぐって　　　　　　　　　　令和３年９月５日

◎聖徳太子（574 - 622）（『三経義疏』を執筆。『法華経義疏』は自筆本現存。）

○（615年。現存する日本最古の書物）

●『法華経』の「」［「安楽な行と題された『法華経』の13章」］

１．「にをみて、かなるにりて、そのをしめよ。」

２．「してす、・、これ・、これ・なりと。

３．かなるにりて、そのをしめよ。してなること、のくせよ。」（この３行は法華経の本文。２と３は偈［詩句］の文）

●これ以下は聖徳太子の解説文

４．には、にすることをむのにせざれ。

５．「」よりののは、の「」をす。

６．めの（＝２）は、「**をむの**」をかし、

　　の（＝３）は、にの「」をす。

７．うこころは、**のるにるがに、をて、のにきて、にをむなり。**［「顛倒」は、「本末転倒」に同じ］

８．にりぬ、「」は、なおに「の」にるべきことを。

◎『』（弟子品）

９．「ただよ、ずしも、これするをとさざれ」（「維摩経」本文）

１０．（＝）、にたり。にのをえて、にれ、てをめんとす。

１１．もし「」なりとして、**（＝あれこれ）せざれば、のりてか、をぜん。**（若解**万境即空**、**不存彼此**者、何有身心而生散乱也）

１２．もし「これなり」として、ずることわざれば、にるとも、ちをぞれん。

１３．**にじて、るべきなく、くべきなし。**

１４．**これをづけて「」（＝坐禅）となす。**（**彼此倶亡**無山可入無世可避…　是名為宴）

１５． （＝）、をして、をてにる…、あにく「」（＝坐禅）とづけんや。のはをむることわざるをす。

●参考：聖徳太子が読んだ「維摩経」の解説本から「宴坐」（＝坐禅）の説明。

# １６．はに「をむる」なりとう。（宴坐梵本云摂身心也）

# 　　　（374-414）『』にある坐禅の説明。

# １７．のをうる、をにし、 （患身之喧動故隠身於山林）

# 　　のをうる、をにむる。（患心之馳散故摂心於一境）

# 　　　吉蔵（549-623）撰『維摩経義疏』にある坐禅の説明。

# １８．くくし。（無彼無此亦無中間）『維摩経』本文。

◎白隠禅師（1685-1769）

１９．**をしてのにせしめ、の（＝関節）、の（＝毛穴）、ばかりものなからしめんことをす。をうなることをるべし。**（この文は「」。以下は「」）

２０． く、「なさざればせず」と。をの、とう。… にもにものがけわんずる**は、ののにえたるはるべからず。**

２１．をばんは、の、の、の、のにりても…。**、のにて**…。

２２．し、をてれりとせば、げてをり、ににせん。にするのみにず、にもせん。

　がぞ、しれはをりをしてし、はをにしをれてし、は…、は…、は…せば、えれ、りにってれからんか。らばちりみて、ずわん、**はめてのなり**と。